idea

ニュースレター「イデア」

2024.10

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　室根神社総代長　鈴木英樹さん（前編）
3｜団体紹介｜　はずみ会
5｜地域紹介｜　台東民区新興会（一関）
7｜企業紹介｜　株式会社 岩手サントップ（大東）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴51 ボランティアで関わることは損なのか？
9｜センターの自由研究｜　くらし調査ファイル№26「ママさんパパさんバレー②」

今月の表紙

蝦夷征討の祈願所として養老2年(718年)に熊野神を勧請したとされる室根神社本宮。850年頃、慈覚大師が天台宗を開山したことで、室根神社は満徳寺という寺になり、全盛期には48院88坊が建ったとか。「奥州天台宗廃滅令」によりそれらも壊滅し、現在は1313年に葛西氏が勧請した新宮とともにこの地を守っています。（二言三言）

idea ニュースレター「イデア」
発行　いちのせき市民活動センター　〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415
せんまやサテライト　〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736
ホームページ:https://www.center-i.org/　メール:center-i@tempo.ocn.ne.jp

おしらせ

イベント　「なかなかZ-1グランプリ2024 at たっこたい 記録会」参加者募集

「NPO法人一関のなかなか遺産を考える会」では、「なかなかZ-1グランプリ2024 at たっこたい 記録会」の参加者を募集します。同イベントは、木造の旧達古袋小学校の長い廊下(119m)を活用し、未就学児は20m、一般は50mまたは80mを雑巾掛けします。参加者には参加賞やベストタイム賞を贈呈(タイムの計測のみで順位はつけません)。詳しくは下記まで。

開催日:2024年11月10日(日)
時間:<受付> 9時～
<開会式> 9時40分～
場所:旧達古袋小学校
(一関市萩荘字八幡154-3)
申込期間:10月1日(火)～23日(水)
参加費:500円※高専・高校生以下無料
問合:0191-29-2511(事務局・阿部)

募集　Jスタッフ協議会「Jスタッフ」募集

一関市藤沢町の一関市藤沢文化センター(縄文ホール)を中心に、舞台装置の設営、操作等に取り組む「Jスタッフ協議会(平成11年発足)」では、一緒に活動する仲間を募集しています。
年齢、居住地、経験等は不問で、興味・関心があれば、誰でも「Jスタッフ」として活動することができます(未経験者向けの講習も希望に応じて可能)。見学も大歓迎(要連絡)。詳しくは下記まで。

活動内容:毎月1回の定例会、イベントの舞台づくり(舞台装置の設営や操作など)
※音響、照明、影アナなどの希望者歓迎
会費:無料
問合:0191-63-5516
(一関市藤沢文化センター)

イベント　「せんまや本町アートフェスティバル」

千厩町本町の空き地・空き店舗などを活用したアートイベント「せんまや本町アートフェスティバル」を下記日程で開催します。
一関ゆかりのアーティストを中心に絵画やインスタレーションなど様々なジャンルのアート作品を楽しむことができます。期間中のイベント情報や作家情報等はインスタグラムにて発信していきます。詳しくは下記まで。

開催日:2024年10月13日(日)～14日(月祝)
時間:10時～17時(14日は15時まで)
場所:一関市千厩町「本町通り商店街」
入場料:無料
主催:せんまや本町通り振興会
問合:0191-52-2606
(事務局・伊庄整体ヒーリング)

募集　一関空手「沖岩会」生徒募集中

一関市を拠点に活動する「一関空手『沖岩会(おきのいわかい)』」では、一緒に活動する仲間を募集しています。現在の会員は幼稚園児～大学生ですが、生徒の年齢、性別、居住地は不問です。指導員が丁寧に教えるので未経験者でも参加できます。
見学のみの参加も可。詳しくは下記まで。

活動日時・場所:
<水曜日>　19時～20時
一関ヒロセユードーム
<日曜日>　9時30分～10時45分
一関市武道館
※活動日や場所等は変更になる場合があります。
月謝:5,000円/一家族
※入会時に空手着の購入あり。
問合:090-9280-4087(代表:岩崎)

情報　「あかり食堂」各種寄付の受付について

「あかり食堂運営委員会」では、子どもたちがのびのびと健康で丈夫に成長できるよう、安心安全な食事と居場所を定期的に提供するため、「あかり食堂(子ども食堂)」を運営しています。
同委員会では、「あかり食堂」の運営にあたり、食品や子ども用品等の寄付を受付けているほか(寄付条件あり)、運営ボランティア(調理や勉強のお手伝いなど)も随時募集しています。詳しくは下記まで。

受付ける寄付内容:
<食品> 米、野菜、調味料、レトルト食品、菓子 等　※各種条件あり
<子ども用品> 衣類や学用品、絵本・児童書、おもちゃ 等
問合:090-2028-5925
(あかり食堂運営委員会事務局)

情報　「イマカラ」情報発信方法が変わります

「イマカラ」は一関市内で開催される「スタッフを募集したいイベント」と、イベントスタッフなど「地域で活動したい人」とをマッチングする仕組みです。これまでは、「スタッフ登録」をしないと、スタッフ募集中のイベント情報が届きませんでしたが、令和6年9月から、登録不要で参加したいイベントを見つけたときだけ申込できるようになりました。
また、「イマカラ」のLINE公式アカウントも開設したので、スタッフ募集中のイベント情報をタイムリーにチェックできます。スタッフを募集したいイベントも常時募集中！
詳しくは下記まで。

問合:0191-26-6400
(いちのせき市民活動センター)

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「神様のお引越し」

花泉町老松の「御嶽山御嶽神明社」にある「いざなぎ社」。一関市花泉町油島にあった「温泉神社」を、令和2年3月に遷座したお宮で、男性・女性のシンボルを模った御神体が。伊邪那岐神・伊邪那美神が御祭りされており、子授け、子孫繁栄等の御神徳があります。

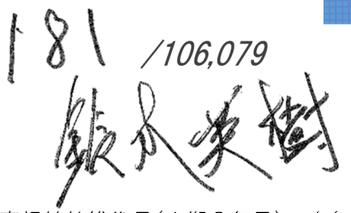
旧町村別の人口動態等を共有します。

2024年**9月1日**付
(2024年8月31日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	106079	-161
世帯数	46344	-38
出生数	32	1

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53391	-63	24619	-11
花泉	11648	-15	4672	-9
川崎	3171	-3	1267	-2
千厩	9516	-21	4079	-3
大東	11485	-20	4849	-8
東山	5706	-14	2267	-2
室根	4256	-9	1800	-3
藤沢	6906	-16	2791	0

181 /106,079



室根神社総代長（１期３年目）。定年で地元に帰郷した平成25年から総代となり、令和４年より総代長へ（※）。室根地域防犯協会会長や室根まちづくり協議会理事等、地域の各種役を担うほか、保護司としても活動中。昭和26年室根町折壁生まれ（在住）。

※旧折壁村を８区に分け、各区から３人ずつ総代を選出。１期３年で、総代の互選で総代長を選出する。

マツリバ会場に入って来た本宮「大先司」。「大先司」の神役は騎乗者だけでなく、馬やその口取り役、旗持ちなど約10役を用意しなければならない。　（平成30年撮影）

第122回　室根神社総代長　鈴木英樹　×　いちのせき市民活動センター　センター長　小野寺浩樹

「世襲制」のプライドと難しさ
～「室根神社特別大祭」のイマとこれから【前編】～

昭和60年、国の重要無形民俗文化財の指定を受けた「室根神社特別大祭」※1。閏年（旧暦）の翌年に行われるこの祭りは、養老2年（718年）に鎮守府将軍大野東人が、難航していた蝦夷征伐に神の加護を頼ろうと、現在の和歌山県田辺市の熊野神を当地に勧請した際の流れを祭事にしたものです。この祭事は世襲制の「神役」によって代々続けられていましたが、その存続が危ぶまれています（2回シリーズの前編）。

小野寺　コロナ禍を経て、今年は6年ぶりの特別大祭ですが、正直なところ、大祭の中身を知る市民は少ないのが現実です。総代長である鈴木さんに特別大祭の概要や文化財指定を受けたポイント等をお聞きし、理解促進の一助に……と思うのですが。

鈴木　まずご理解いただきたいのが、総代長の私やその他23人の総代は、神社の維持管理をする役目であり、実は大祭そのものの音頭を取ったり、責任者的なものではない、ということ。「総責任者と言える人がいない」ということが、ある意味でこの祭りの魅力であり、難しさでもあります。

小野寺　それは、どういうことでしょうか？

鈴木　現在、特別大祭は「神役会議」「総代会」「裛先陣保存会」「協賛会」「室根神社祭保存会」「荒馬先陣保存会」「寄内祭実行委員会」等の各種団体の協力により行われていますが、本来は「神役」と呼ばれる、熊野神の勧請に携わった人を先祖に持つ人々により受け継がれてきた祭りです。神役がそれぞれの役目を担うことで成り立つ祭りなので、全体の指揮をとる人というのはいないんです。

小野寺　なるほど、総代長は普段の神社の維持管理については権限があっても、この祭りに関しては側面的支援のみ、ということですね。

鈴木　そう、勧請当時は総代なんていませんから。あくまでも当時の権限が受け継がれているわけで、神役の中で最も責任のある立場は本宮の「大先司」なのですが、実は神役を維持できなくなり※2、他にも絶えてしまった、絶えかけている神役があり、特別大祭自体の継承を考える時期にきていると思います。

小野寺　世襲制度ってカッコ良いなぁと思っていたんですが、やはり難しさもあるんですね。ちなみに勧請に携わった人々の世襲ということは、神役さんたちのルーツは和歌山にあるということですか？

鈴木　和歌山から熊野神の御霊を守りながら来た役（大先司や御先旗など）のルーツは和歌山ですが、当地で出迎えた役（陸尺頭、荒馬先陣など）のルーツは当地の郷長等です。

小野寺　ご先祖様の当時の立場や役目を1300年も受け継いでいるって、やっぱりカッコ良いなぁ……（笑）

鈴木　そういう部分が文化財指定の由縁だとは思うんですが、現実的には神役の負担は大きく、神役であるがゆえに家が経済的困窮に陥ったりしています。例えば実際に神役が維持できなくなった大先司の場合、約10人程の人を雇わなくてはいけません。馬が必要なので、馬の口取り、旗持ちなど、大先司という立場に関係する役付きを自身で用意します。立場上、昔は家としての羽振りも良かったようですが、次第に苦しくなり、家族や親類だけで担うこともできず……。

小野寺　神役は一人でも、そこに付いていた人馬なども1つのセットとして、神役の家で担わなければいけないんですね。

鈴木　そう。そして女人禁制なので、女家系になってしまうと辛くなる。「うちにはもう私と娘しかいないからできません」という神役からの相談もありますが、「家系を辿って男性を見つけてください」と説得するしかないんです。

小野寺　神役はいくつあって、そのうち継承が危ぶまれている役はどれくらいあるんですか？

鈴木　本宮・新宮のそれぞれにある神役もあるので、約35の神役があります。そのうち当初の家から受け継がれ続け、今も安泰と言えるのは10役程度でしょうか。大先司も本来は本宮・新宮それぞれ2つの家があり、交互に担っていたのですが、本宮は1つの家のみが遠い血筋の支援で継承、新宮は休祭としてどちらも出さなかった年があり、現在は旧2区※3が大先司を出したり……と、実は何年も前から世襲制度の限界は顕在化していたんです。

小野寺　背景にあるのは経済的負担や家の縮小でしょうか？

鈴木　そういう家もあります。役によっては100万円くらいかかり、それが約3年毎に行われるわけですから。

小野寺　神役を継承したせいで枯渇するというのは皮肉な話ですよね……。保存会化した役もあるようですが？

鈴木　「荒馬先陣※4」は平成17年に、「裛先陣※5」は平成29年に保存会化しました。荒馬先陣はそれまでは9つの「組」で、裛先陣は「家元」と呼ばれる家系で担ってきましたが、どちらも継承が難しくなり、当該地域有志で任意団体を組織したようです。

小野寺　時代もありますよね。その昔は裛先陣を出すことが誇りや憧れだったんでしょうけど。

鈴木　そう、男の子が生まれると、家元に頼んで若殿様にしてもらったんです。ただ、行列の費用をその家が抱えるので、2～300万円かかったりする…。

小野寺　本来はもう少し質素だったのかもしれませんが、時代と共に派手になっていって、大きくなっていって、その結果金銭的負担が大きくなったのかなと推測します。

鈴木　そこに少子高齢化も相まって、ますます大変です。そして政教分離の関係で行政としても補助が難しい。でも実は、「室根神社特別大祭」と言った時に、神事の部分とそうではない部分があるので、神社の中と外の部分は区分けして見てくれれば、行政が補助できる部分もあると思うんですが……。

小野寺　世の中の伝統芸能関係は高齢化とともに継承がどんどん難しくなっていますが、多くの伝統芸能は神事にルーツがありますからね。

鈴木　ちなみに、我々総代も室根神社本殿の中で行われる祭儀で何が行われるのかは知りません。特に「神移し」の際には、メディアなども退出させられるので、宮司とそこに関係する神役しか分からないんです。そうした本当の神事部分と、勧請を再現する部分とは、意味合いが違うような気がします。

【次号へ続く】

※1　指定を受けたのは「室根神社祭のマツリバ行事」。なお、閏年の翌年に行う祭事が「室根神社特別大祭」であり、いわゆる「例祭」は毎年開催している。
※2　現在は血筋を辿り、遠い血筋が経済的支援を行うことで、大先司を継承し続けている。

※3　現在の折壁１丁目と八幡沖住民の中から任意に組織形態を作った。
※4　熊野神を室根山に運ぶ途中の峠で、矢越地区の人々が白馬17頭を連れて、出迎えたエピソードに由来する神役。
※5　江戸時代に加えられたとされる「大名行列」。

団体紹介

「2枚看板」で幅広く地域に貢献

はずみ会

はずみ会
昭和58年に発足した「食生活改善推進員協議会花泉支部」の花泉地域会員で平成27年に結成（それ以前から地域と連携した活動はあり）。食生活改善推進員としての地域への普及啓発活動と、地域の幅広い食事ニーズへの対応を担っている。

※問い合わせは一関市花泉市民センターへ
TEL：0191-82-4375

写真：「はずみ会」メンバー（令和６年９月撮影）

「食」に関する地域のニーズに応えるために

「はずみ会の時は青いエプロンで、食改の時はピンクのエプロンなの」と、笑顔でユニフォームの説明をする「はずみ会」会長の菅原恵子さん。「食生活改善推進員（以下、食改）協議会花泉支部」においては、地域選出の理事の立場です。

バランスのとれた食生活の定着を目的として地域での食育・栄養改善活動を行う「食改さん」は、全国規模の組織があり、当市においては、「一関市食生活改善推進員協議会」の下に旧町村毎の支部があります。支部によってはその下に地域組織があり、花泉支部は組織化まではしていませんが、7地域に分かれての活動が中心です。

このうち、花泉支部花泉地域の食改さんを中心に、平成27年7月に結成されたのが「はずみ会」です。組織化することで「より柔軟に公民館（現市民センター）などと連携した活動ができる」、「2枚看板にすることで、食改さん以外の人も会員になれる」という当時の花泉公民館職員の提案で組織化。その目論見通り、「はずみ会」として幅広く地域のニーズに応えながら、食改としての使命もしっかり担い続けています。

「お互い様」の料理教室

令和6年6月、「地域の人からのリクエストで料理教室をする」ということで、見学に伺いました。この日は、「教えて欲しい」という要望があった郷土菓子3種（あけがらす、ゆべし、落雁）をメインにしつつ、食改の「食生活改善普及講習会（通称・伝講活動）」も抱き合わせ、小松菜を活用したおかずなど、計7品を9名の参加者と一緒に調理しました。

食改花泉支部では、「健康のタネをまきましょう事業」と題して毎年テーマ食材（野菜）を設定しており、昨年度が小松菜。テーマ食材は地域毎に種から育て、レシピの勉強・作成を行います。今回調理した小松菜を活用した2つのレシピ（小松菜とかつお節の混ぜご飯、青菜と桜エビのだし酢あえ）も、昨年度学んだレシピとのこと。

「〇〇を作ってみたい、という要望があると、私たちも勉強になるし、食改としての講習会をする機会も与えてもらえるのでありがたい」と菅原さん。参加者からも「レシピを見るだけだとよく分からないけど、実際にやってみると案外簡単。家でもやってみよう」という嬉しい声が聞かれました。

食改としての講習会は各地域年4回程度実施することになっており、集落のサロンにお邪魔したり、児童クラブなどと連携することも。今年度は集落PTA（子ども会育成会）にも声をかけ、幅広く連携・普及の場を持つようにしています。

地域における「食事提供」の「プロ」として

花泉地域で約30年に渡り行われている「ふれあい給食」にも協力している同会。花泉地区福祉推進協議会による事業で、年に2回、72歳以上の一人暮らし世帯と77歳以上の高齢者のみ世帯を対象に配食を行います。コロナ禍以前は、食改としてレシピの作成等を行い、婦人会や民生委員等と一緒にお弁当を作っていましたが、コロナ禍以降は「はずみ会」がレシピ作成から調理の全てを担い、民生委員や区長等が対象者宅に届けています。

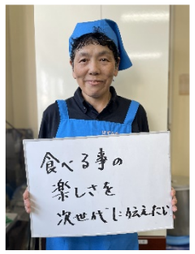
近年はスタッフ分も含め約110食作っており、その準備は容易ではありませんが、「受け取る皆さんの笑顔を思い浮かべながら頑張っています」と、やりがいを感じています。

また、市民センター等が行う子ども向け事業にも長年協力。季節行事などの際に、ケーキやゼリーなどを準備したり、一日を通した事業の際には昼食を調理するなど、保護者の負担軽減にも貢献しています。令和6年7月に一関市花泉市民センターが開催した「夏休み寺子屋」では、カレーとサラダを用意しましたが、多くの子どもたちがおかわりに並び、途中で品切れに！「毎回、どれくらい用意すれば良いか予想がつかないのよ」と、会員の皆さんは嬉しい悲鳴をあげます。

現在、同会会員は8人。昭和60年頃に地域活動が始まって以来、人の入れ替えはありつつ10人程度での活動を続け、20年以上の活動歴になる会員も。食改さんになった経緯は様々ですが、交流や友達づくりが目的だった会員も少なくありません。2枚看板スタイルでの活動を続けることで、顔を合わせる機会は多く、地域のニーズにも柔軟に対応できます。幅広い「食」に関する役を担いながら、地域・家庭の健康づくりにも貢献し続けます。

Q.活動を通して伝えたいことは？

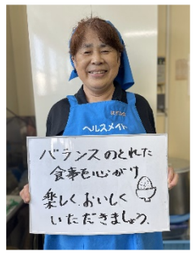
会長



A. 食べる事の楽しさを次世代に伝えたい

菅原（すがわら）　恵子（けいこ）さん
平成10年頃に花泉町花泉に引っ越して来た際、従妹に誘われ、友達作りのために食改の養成講座を受講。子ども教室の指導員としても長年活動しています。

副会長



A. バランスのとれた食事を心がけ楽しくおいしくいただきましょう

阿部（あべ）　喜伊子（きいこ）さん
平成25年頃、花泉町涌津の知人に誘われて受講。同会ではレシピ作成を担当しているほか、現在は花泉支部の支部長も務めています。

- Photo gallery -

気づきの多い料理教室
普段から馴染みのある食材でも、切り方や味付けなど、お互いに情報交換することで、レシピ以上の学びを得られます。

私たちが作りました
「夏休み寺子屋」に参加した子どもたちの前で紹介を受ける会員たち。この日は25人分の昼食を作りました。

「おかわり」で交流
おかわりをしに来た子どもたちと「何年生になったの？」「大きくなったね～」と会話をするのも楽しみです。

彩りも意識して
「ふれあい給食」で配食するお弁当。栄養、食べやすさだけでなく、彩りも意識したお弁当は毎回好評です。

「地域の宝」と「交流」を大切に

一関 台東民区新興会

台東民区新興会（一関）

行政区は台東区。旭町（一部）、字機織山（一部）、千代田町（一部）、南町（一部）、真柴字千刈田（一部）の260世帯564人（23班体制）が暮らす。総務部、文体部、衛生部、防災部の４部会制で自治会運営を行う。

左の写真：自治会役員が自治会館前にパイプで組んだやぐら（令和６年の盆踊り大会にて）

自治会発足時からコミュニケーションを大事に

一関市台町の東側に位置することから名付けられたと言われる「台東区」は、カスリン・アイオン台風の水害復興住宅建設や、北上製紙株式会社の創業（昭和23年／現在は閉業）によって周辺の団地造成が進んだことなど、世帯数の増加を理由に、昭和32年に「一関６区（当時）」から分区して誕生した行政区です。自治会活動を行う「台東民区新興会」は、「台東区」の誕生と同時に発足し、今年で67年が経過しました。

同会の発足時から継続して発行している「台東民区だより」は、地域の情報を届けながらコミュニケーションツールとしても活用しています。毎月第２日曜日には、その月にあった地域の動きや相談事を話し合う役員会議（会長・副会長・各部役員が出席）を開くほか、お祝い金制度やお見舞金制度も設けており、同会は昔から住民との密接な関係を築いてきました。

東北ヘアーモード学院、一関藤保育園、一関警察署南駐在所や各種企業が立地しているほか、一ノ関駅から徒歩10分圏内に位置することから地域住民以外の人も多く行き交う同エリア。さらに、令和２年まで団地造成が行われ、近隣に一関市立南小学校や一関市立一関中学校があるなどの理由から子育て世代が多く入居してきました。

その一方で、「元々住んでいた人たちが、高齢者一人暮らしや老夫婦のみ世帯になる例も増えています。また、２人体制の副会長が１人欠けている現状など、役の担い手にも苦労しています」と、会長の菊地慶夫さんは、今後の自治会運営に不安を見せます。

夏の行事で「つながり」づくり

同会では、盆踊り大会と運動会を隔年で30年以上続けていましたが、「隔年で行うのは大変」という声があがり、10年ほど前、事業の見直しによって運動会は終止符を打ちました。菊地さんは、「運動会がなくなったことは寂しいですが、力を注ぐ事業を一本にすることで負担が減りました」と話し、「より一層、盆踊り大会で地域を盛り上げていきたい」と前向きな姿勢を見せます。

同会役員とPTA、青年会、住民有志などで構成する「盆踊り実行委員会」は、毎年開催となった盆踊り大会で、くじ引き等の企画や飲食を充実させたりと、老若男女問わず楽しむことができるよう工夫を凝らしています。また、「かき氷」は小学校PTA、「焼き鳥」は中学校PTAに役割を持たせ、若い世代が活躍する場にもなっています。

今年の盆踊り大会では、コロナ禍を経て４年ぶりに「子ども神輿」の復活を目指していましたが、主体的に担ってきたPTAの間で引継ぎが上手くいかなかったため、復活は叶いませんでした。今後については同会役員とPTAで話し合っていくそうです。

菊地さんは、「500人以上が住む地域ではあるものの、行事に参加する人は毎回同じで、子どもの人数も年々減少しています」と悩みながらも、「人口が多いからこそ盆踊りのような交流の機会は大切にしています。新しく団地に入居してきた若い世代も、地域への関わり方には不安を感じると思いますが、まずは明るく、楽しい地域だということを、行事を通して知っていただきたいです」と話します。

伝えたい「地域の宝」

同会の位置するエリアには、かつて一関を治めたと言われる「留守政景」の墓があります。「留守政景ゆかりの地」として全国から人が訪れていたため、住民有志で墓周辺の環境整備を行っていましたが、高齢化に伴い作業が難しくなったことに加え、標柱が朽ちたこともあり、近年は墓を訪れる人が少なかったとか。こうした状況から「単独自治会では解決が難しい」と判断し、一関南地域エリアの10行政区※1に協力を呼びかけ、「一関地区まちづくり推進協議会」が独自に実施している「元気な地域づくり交付金事業※2」に申請すると、令和5年10月に採択が決定。同交付金を活用し、同年12月に案内板を新設しました。菊地さんは、「住民の中にはこのお墓の存在を知らない人も多いかもしれないため、地域の宝だということを普及していきたいです」と今後の目標を話します。

発足当初は課題になるとは思わなかった問題が顕著になってはいるものの、発足当初から大事にしてきた「交流」を軸に、これからの自治会活動の在り方を見据えていきます。

※1 一関5区、一関6区、一関7区、一関8区、一関9区、一関19区、一関20区、高崎区、釣親区、台東区

※2 地域づくり計画に基づいた地域課題の解決に取り組む団体を応援する交付金事業。

Q.集落の自慢は何ですか？

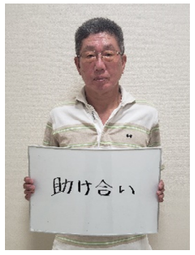
会長

A. 自然が豊富！

きくち　よしお
菊地慶夫さん

副会長を４期７年経て現職に（４期８年目）。約半日かけて23人の班長宅に届ける広報の配布は、住民との大事なコミュニケーションの機会だと言います。

総務部長



A. 助け合い

あべ　のりお
阿部典男さん

総務副部長を経て現職に（５期10年目）。総会資料の作成を依頼されたことがきっかけで、自治会活動に参加することに。

- Photo gallery -

子どもの参画が目的

毎年６月に一関中学校の通学路の草刈りを実施。今年は23人の大人と７人の子どもが参加し、通学路を綺麗にしました。

地域に眠る偉人

「留守政景の墓」の案内板を設置するため、国土交通省（東京都）に申請を行いました。地域にとって大切な宝です。

地域を越えて紡ぎあう

一関地区まちづくり推進協議会が協力し「留守政景の墓」の環境整備を行う有志を募集したところ、地域内外の７名が参加。

毎年8月15日開催

今年の盆踊り大会は、「須川音頭」と「くるくる踊り」に未就学児～80代の120人が参加し、「熱い夜」になりました。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴 51

ボランティアで関わることは損なのか？

「まちづくり」は誰のため？

近年、「市民と行政の協働」「協働型社会」などが強調されますが、その背景には、現代社会の課題の複雑化・難解化があるのだと思います。行政だけで課題を解決しようとすると**‘当事者の視点’**が欠け、地域だけで考えると**‘専門性’**が足りなくなってしまう……。そこで必要になるのが**「協働」**で、**異なる主体が同じテーブルで議論**することで、**発想の転換や経験・専門性の掛け算**をする。それを実現するために「地域協働体(RMO)」が設立され、‘協働による地域づくり(地域協働)’を促進させているのです。

協働は、「地域づくり分野」だけがするものではありません。「福祉分野」も「観光分野」も「産業分野」も、**‘異なる主体との議論(協働)’**が求められます。

事例として、農福連携(※)は、農作業に障がい者が従事するなど、まさに農業分野と福祉分野が連携している現場ですが、個人的には「‘現場’が出来上がる前の段階」が安定していないと、形だけの連携にしかならないのでは？と思ってしまいます。要するに、異なる主体が集まって同じ目標に向かうためには、**‘現場’に至るまでの‘プロセスの共有’が大切**であり、**プロセスを知ることで各主体の役割分担が成立し、本当の意味での連携ができる**ということです。

しかし、その‘プロセスの共有’が簡単なようで難しく、現場を見ていると、ここが一番苦戦する部分だなと日々感じています。とある実行委員会の会議に出席した際、目的などを丁寧に共有しながら進めていても異論を唱えられたり、異論から個人攻撃になったり、挙句の果てに、「あなたたちと違って、私は、ボランティアで関わっている」と言われ……。実行委員会形式のものは、関わる人たちのほとんどがボランティアで関わっているのですが、「自分だけがボランティアである」と意見されるのは、不愉快に感じます。

そもそも**ボランティアというのは、個人の意思で関わることであって、無償(無給)で関わることがボランティアではありません**。我々も無償で関わっているのですが、そうは理解されていないようです。市民活動や地域づくりの文脈で、様々な場面に顔を出すことが多いのですが、それが‘業務’かというと、業務ではないのです。業務時間に関われるようにしているだけで、そこに割かれた分の本来業務や時間の補填を、どこかでやっているのです。「まちづくり・地域づくりに関わっているから」というだけで、全てが業務と見なされる悲しい現実。

それでも「まちづくりに参加する理由」は、どこにあるのでしょうか？その答えは**「自分の住むまちが持続的で、安心して安全に暮らせるようにするため」**です。企業のまちづくり参加もその意味合いがあります。仕事になるからという理由の前に、まちの不安定さにより企業活動ができなくなることが最大のリスクであり、**企業活動を継続していくためには、まちに関わって安定さを共に構築**する。それが企業の社会的責任とも言われています。

先の話に戻りますが、「ボランティアで関わることが損である」という発言をすると、その人のマイナスイメージだけでなく、その人が背負っているものまでマイナスイメージになってしまうのではないでしょうか？

ボランティアでは生きていけないのは分かります。ですが、**損得勘定だけで動くことは、信頼関係を失い、顧客を失うことにつながります**。人口減少が進むということは、まちの規模も縮小するということです。小さなまちや地域は、‘良いことも悪いことも見えてしまう環境’であり、配慮に欠けてしまうと良くない噂が……。どれだけ配慮しても意見の受け止め方には個人差があるため、100%の配慮は難しいですが、信頼関係だけは失いたくないものですよね。「積極的にボランティアをしましょう！」とは言いませんが、**仕事と生活を安定したものにするためには、みんなでまちや地域に関わり、安定的な状態を維持しなければいけません。**

自治会不要論を唱える住民がいることも聞きますが、暮らしの中で自治会組織や活動に支えられていることを忘れてはいけません。見えないところで、誰かが支えてくれているのですから。

毎年8月に開催し、様々な分野で“まち”を支える団体・企業等が一堂に会す「いちのせき市民フェスタ」。互いの活動に共感し合い、支えられていることに感謝し合う場があることで、損得勘定から抜け出せるのかもしれません。

※ 障がい者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく取組のこと。

企業紹介

大東 株式会社 岩手サントップ

世界的に有名なブランドである、ポール・スミス、パパス、アングローバル(マーガレット・ハウエル)、コムデギャルソン(オム・ドゥ)等のメンズ・レディースのスーツ、ジャケット、コートなど、「パリコレ」でモデルが着用することもある製品を手掛ける縫製工場で、昭和55年11月創業。東北・海外に計10工場があり、一括で本社(東京都)が管理。令和２年から「いわて女性活躍認定企業等(ステップ１)」の認定を受け、産休・育児休業・職場復帰後の時短勤務等の制度や、互いに支え合う環境を築く。従業員の国家資格取得のサポートなど、技術向上と品質へのこだわりを大切に、時代に合ったモノづくりを行う。

世界のファッションにつながる縫製技術を磨く

地域の雇用を守り技術向上を目指す

株式会社岩手サントップ(代表取締役 平澤邦朗氏、大東工場 専務取締役兼工場長 矢野洋一氏)は、一関市大東町内で閉鎖した縫製工場の敷地や建物、工業用ミシン等の機材を買い受けし、昭和55年に創業しました。前従業員の雇用を継続し、「縫製業界の時代の変化」も経験しながら、同社が縫製した製品は海外のモデルやアーティストなども着用するなど、トップクラスの技術を誇る縫製工場です。岩手県内には二戸市に「株式会社二戸サントップ」、秋田県内には３つの工場があり、グループ企業となっています。

同社が縫製する製品は「ポール・スミス」をはじめ世界的にも有名なブランドが多く、製造の約８割はメンズカジュアルジャケットで、企画の打ち合わせから設計、裁断、縫製、仕上げまで行う、一貫生産体制です。

工場勤務の従業員はベテランも多く80人ほどで、約９割が女性。メーカーからのハンドメイド要請にも応えるため、市内外に手縫いを専門とする内職者も約30人専属契約しており、「各ブランドからの要求を１００%形にすることができる工場」を目指し、基本理念に掲げています。

「市内に被服について学べる高校があり、学校を通じて生徒の企業見学を受入れ、入社につながるケースも多いですね。若手の育成にも力を入れており、新入社員研修のほか、全従業員での勉強会やグループ企業との研修会も定期的に開催しています」と語るのは、工場長代理の佐藤裕明さん。

特に力を入れているのが、入社５年目以降の従業員の「紳士服製造技能士資格」の取得。現在は、15人が有資格者(一級紳士服製造技能士４人、二級紳士服製造技能士11人)で、その技術を活かして縫製された製品は、海外でも愛用されています。

若者の夢を地元で実現できるように

同社では、地元中学生の社会体験学習を毎年受け入れており「１着の服がどのような工程で仕上がっていくか」を知ってもらう機会を設けています。「学生など若者が縫製に興味を持ってくれるのは嬉しい。その興味を活かせる企業でありたい」と佐藤さん。「世界に通じる縫製の技術は中央(都市部)だけではなく、地元にもあります。将来、ファッションや縫製に携わりたいという夢を持つ生徒が、少しでも地元に残るという選択をして欲しい。そして、技術を継承してもらえれば……」と、若者の夢に期待を寄せます。

毎年夏には工場敷地内で納涼祭を開催するなど、季節ごとのイベントなどで交流の場も大切にしている同社。令和５年からは、多くの方に「岩手サントップ」を知ってもらうため、ホームページやインスタグラムも開設し、縫製の魅力のほか、従業員の輝く笑顔や交流の様子も発信中です。

従業員が安心して働ける環境づくりに努めるとともに、縫製業界の発展にこれからも貢献し続けます。

1 工場長代理の佐藤裕明さん。

2 同社で縫製したブランドジャケット。

3 グループ企業との研修で技術を磨きます。

DATA
〒 029-0711
一関市大東町大原字有南田91
TEL 0191-72-2615
FAX 0191-72-2800
HP https://iwate-suntop.co.jp

ミッション89

くらし調査「ママさんファイルNo.26 パパさんバレー②」

昭和42年に**「大東町家庭バレーボール競技規則」**が定められて以降、県内屈指の「バレーボールの町」となっていった旧大東町（以下、大東町）。その背景や歴史を辿りながら**「大東町のバレーボール文化」**を紐解くべく、前号では昭和30年頃から顕在化した**「農夫症問題」**と、**「その解消という大義名分の元に取り組まれたバレーボール」**にスポットをあてながら、平成元年までの歴史を紹介しました。今月号では平成以降と現在進行形の動きを見ていきます。※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

■バレーボール日本一のまち

昭和40年頃から大東町興田地区で普及した「家庭バレーボール大会」は、大東町体育協会連合会主催の「大東町婦人バレーボール大会」へと移り変わり、「人と人、集落と集落を繋ぐ一つのツール」として町を挙げての一大イベントに成長。平成元年には「朝日体育賞」を受賞しました（前号参照）。

この前年、**「バレーボール日本一のまちづくり構想」**を掲げるに至る大きな節目が。昭和63年、竹下内閣のもと「地方が知恵を出し、中央がこれを財政支援する」という、これまでの発想とは異なる**「ふるさと創生事業」**が打ち出されました。財政支援は市町村毎に行われ、昭和63年度に2千万円、翌年度に8千万円、合わせて1億円という金額。「自らに、使途は各市町村の自由とされ、考え、自ら行う地域づくり」を目的市町村の発想に委ねるものでした。

大東町では**「ふるさと創生検討委員会」**を設置。広報で「ふるさと創生～みんなで活かそう1億円」と題し、**「地域づくりにユニークな提言を」**と、この事業実施のための**アイディア等を町民から募集**、70件の提案が寄せられました。

同委員会では、様々な角度から検討を加え、大東町のふるさと創生事業として、心身ともに健やかで活力ある地域づくりを推進しようと**「バレーボール日本一の町」づくり**を採択。これを受けた町では、この構想を実現するため、**「スポーツ・コミュニティ育成事業」「バレーボール記念館建設事業」「大東町総合運動公園整備事業」**の3つの事業を一体的に推進していくのです。

バレーボール日本一の町構想

『大東町史下巻』より

- バレーボール日本一の町
  - スポーツ・コミュニティ育成事業
    - ■スポーツ・レクリエーション活動
    - ■コミュニティ行事
    - ■地域産業の振興
    - ■文化・学習活動
    - ■生活環境の整備
    - ■コミュニティ施設整備
  - バレーボール記念館建設事業
    - ■バレーボール記念館建設
    - ■指導者育成
    - ■スポーツイベント
  - 大東町総合運動公園整備事業
    - ■陸上競技場(多目的運動場)
    - ■テニスコート
    - ■屋外プール
    - ■子どもの遊び場

■自治会単位で整備

平成2年、ふるさと創生事業を活用し、**行政区単位に100万円を上限とした補助（スポーツ・コミュニティ育成事業）**を行うことにした大東町。バレーボールの練習環境整備を推奨されたため、多くの自治会※がバレーボールコートの整備や、備品購入（ネットや支柱、ユニフォーム等）を行いました。当時を知る行政OBの方からは「自治会の多くが夜間のバレーボール練習用に**夜間照明**を整備したのでは？」という話もあり、この事業が大東町のバレーボール文化に大きく貢献したことが伺えます。なお、自治会館前にバレーボールコートを整備した自治会の中には、駐車場に再整備した自治会もありますが、夜間照明はそのまま活用しているなど、当時の名残を見ることができます。

※行政区に補助されたものを自治会で活用

大東町に寄せられた「ふるさと創生事業」の活用アイディア

町民から寄せられた70件の提案の中から「バレーボール日本一の町」を目指すこととした大東町。他にも、様々なジャンルの、ユニークな事業案がありましたので、一部ご紹介します。

【産業振興（21件）】淡水魚日本一の里づくり、1億円でいわい牛の購入、日本一の赤松観光、県下アユ釣り大会の開催　他

【保健・医療（1件）】ケア・ハウスの設置

【教育・文化（32件）】町おこしカルチャーセンターの建設、日本一作りカンパニーの設立、サイエンスヒルズ構想　他

【地域アイデンティティ（6件）】桜並木事業、森林整備　他

【その他（8件）】人増やし基金の設定、温泉ボーリングの実施　他

大東町ママさん・パパさんバレーボール大会の歴史を深堀りしてみた②

昭和41年の興田体育協会主催「第1回家庭バレーボール大会」開催後、大東町全域に家庭バレーボールが広がり、昭和43年に「第1回大東町婦人バレーボール大会（後のママさんバレーボール大会）」が開催されました（前号参照）。今月号では平成以降の歴史を深堀りします！

平成元年	朝日体育賞（朝日新聞社）受賞
平成2年	ふるさと創生事業**「バレーボール日本一の町」構想**により**各行政区に補助金**が。自治会館にバレーコート、照明や備品などが整備される
平成4年	・「大東町民まつり」のメインイベントとして「24時間バレーボールラリー」開催 ・ママさん/パパさんバレーボール大会に**過去最高の268チーム（合計）が参加**
平成5年	・「体力つくり国民会議」議長賞受賞 ・「大東町家庭バレーボール競技規則」一部改正
平成6年	自治省（当時）の「潤いと活力のあるまちづくり優良地方公共団体自治大臣表彰」における「住民参加のまちづくり」部門で自治大臣賞受賞
平成7年	・**「大東町バレーボール記念館」**完成 ・第10回全国「大東」サミット開催。ママさんバレーボール大会に合わせて、島根、大阪、静岡の同名市町チームが来町し、バレー交流を行う
平成13年	参加チーム200チームを下回る
平成18年	市町村合併により大会名が**「一関市大東町ママさん・パパさんバレーボール大会」**に変更
平成22年	・ママさん・パパさんバレーボール大会を2日開催から1日開催に変更 ・参加チーム150チームを下回る
平成25年	町外に住む**「ふるさと選手」を参加資格に追加**
平成27年	参加チーム100チームを下回る
平成28年	「ママさんの部シニアブロック」を廃止し、**「男女混合ミックスの部」**を新設
平成29年	・大東町家庭バレーボール大会50回記念一関市大東ママさんパパさんバレーボール大会開催 ・「大東町家庭バレーボール50回大会記念誌『大東町家庭バレーボール半世紀』」を作成
令和元年	台風とコロナ禍のため開催中止となり、令和4年まで中止が続く（連続中止は初めて）
令和5年	・5年ぶりに大会開催 ・参加チーム増に向けて大会の在り方を検討
令和6年	**新たな形のバレーボール大会として再出発**（名称変更は無し、18歳以上の居住者を対象）

参加資格から**既婚条件を撤廃**し、チーム人数も**8人から6人制へ変更**。**3自治会までの合同チーム**が可能に！

※参考文献等は誌面スペースの都合上、当センターHPにて掲載します。

夜間練習の様子（平成7年）

補助金でバレーボールコート等を整備し、多くの自治会が夜間練習に力を入れた。ユニフォームを揃えた自治会も多数（それまでは子どものおさがり運動着を着て大会に出場していたママさんたちも多かった）。

「大東町家庭バレーボール競技規則」に則り、8人制で行われてきた大東町のバレーボール大会（令和6年度からは6人制へ）。年代別に出場枠を設け、多世代が参加できる仕組みになっています。時代に合わせ、何度かルール改定も行っており、平成後半になると「ふるさと選手」が参加資格に追加されたり、男女混合ミックスの部が新設されています。

「ママさん・パパさんバレーボール大会」要項比較（抜粋）

	平成5年度 → 30年後の比較	令和5年度
目的	誰もが気軽に楽しめるバレーボールを通じて、健康の維持増進を図る。	バレーボールを通じた地域づくりと、継続的に運動やスポーツに親しむ機会を提供し、健康・体力の保持増進を図ることを目的とする。
参加資格	町内居住（住民台帳に記載されている者）既婚者。ただし、30歳以上の者については、未婚者でも可。	①一関市大東町に居住している30歳以上の者、または29歳以下の既婚者。 ②大東町外に居住する大東町出身者およびその配偶者をふるさと選手とし、出身自治会のチームに、1チーム2名まで登録することができる。年齢資格は①と同じとする。
チーム編成	①行政区単位のチーム編成（単一行政区でチーム編成が困難な場合は、隣接する行政区から2名以内の補充を認める。ただし、シニアの部については地区体協単位までの編成は認める） ②監督・コーチ各1名、各年代別の正選手8名及び補欠で編成する。 ③該当する年代の選手がいない場合には、上の年代より繰り下がることができる。	①自治会単位のチーム編成とするが、単一自治会でチーム編成が困難な場合は、同一地区内の他の自治会より2名まで補充可。 ②代表者（監督）1名、コーチ1名、選手14名以内で構成する。 ③該当の年代選手がいない場合、上の年代より繰り下がることができる。
部門別人数	【ママさん】 30歳未満…2人 30歳以上40歳未満…4人 40歳以上…2人 【パパさん】 30歳未満…1人 30歳以上40歳未満…3人 40歳以上45歳以下…2人 46歳以上…2人 【シニアの部ママさん】 46歳以上…8人 【シニアの部パパさん】 51歳以上…8人	【ママさん】 40歳未満…4人 40歳以上…4人 【パパさん】 40歳未満…4人 40歳以上…4人 【シニアの部パパさん】 51歳以上…8人 【ミックスの部】 女子…8人（40歳未満4人／40歳以上4人） 男子…4人以上（51歳以上） ※試合中は男子4、女子4で行う。 ※ふるさと選手は出場不可。 平成28年に「シニアの部ママさん」を廃止し「男女混合ミックスの部」新設

平成29年「大東町家庭バレーボール大会（≒ママさんバレーボール大会）」は記念すべき50回目を迎え、記念大会を開催するとともに、記念誌も発行。この時のママさんの出場チーム数は41チームで、5年ぶりに40チーム以上が出場した。

「ママさん・パパさんバレーボール大会」を応用して……

大東町摺沢の「羽根折沢自治会」が平成27年から開催している**「どろんこバレー大会」**。「集落内の休耕田活用と住民の交流」を目的に始めましたが、話題を呼んだことから「もっと広めて多くの人に羽根折沢に来てもらおう」と、翌年から市内外へ発信し、地域内外から参加チームが集まるように（コロナ禍で令和2年から休止）。開催を望む声もあり、復活に向けて自治会で検討はしているものの、残念ながら復活開催の目途は立っていないようです。